

聖霊降臨後第十主日（7月24日の聖書箇所）

I 第一朗読・創世記18章20—33節

20 主は言われた。「ソドムとゴモラの罪は非常に重い、と訴える叫びが実に大きい。21 わたしは降って行き、彼らの行跡が、果たして、わたしに届いた叫びのとおりかどうか見て確かめよう。」22 その人たちは、更にソドムの方へ向かったが、アブラハムはなお、主の御前にいた。23 アブラハムは進み出て言った。「まことにあなたは、正しい者を悪い者と一緒に滅ぼされるのですか。24 あの町に正しい者が五十人いるとしても、それでも滅ぼし、その五十人の正しい者のために、町をお赦しにはならないのですか。25 正しい者を悪い者と一緒に殺し、正しい者を悪い者と同じ目に遭わせるようなことを、あなたがなさるはずはございません。全くありえないことです。全世界を裁くお方は、正義を行われるべきではありませんか。」26 主は言われた。「もしソドムの町に正しい者が五十人いるならば、その者たちのために、町全部を赦そう。」27 アブラハムは答えた。「塵あくたにすぎないわたしですが、あえて、わが主に申し上げます。28 もしかすると、五十人の正しい者に五人足りないかもしれません。それでもあなたは、五人足りないために、町のすべてを滅ぼされますか。」主は言われた。「もし、四十五人いれば滅ぼさない。」29 アブラハムは重ねて言った。「もしかすると、四十人しかいないかもしれません。」主は言われた。「その四十人のためにわたしはそれをしない。」30 アブラハムは言った。「主よ、どうかお怒りにならずに、もう少し言わせてください。もしかすると、そこには三十人しかいないかもしれません。」主は言われた。「もし三十人いるならわたしはそれをしない。」31 アブラハムは言った。「あえて、わが主に申し上げます。もしかすると、二十人しかいないかもしれません。」主は言われた。「その二十人のためにわたしは滅ぼさない。」32 アブラハムは言った。「主よ、どうかお怒りにならずに、もう一度だけ言わせてください。もしかすると、十人しかいないかもしれません。」主は言われた。「その十人のためにわたしは滅ぼさない。」33 主はアブラハムと語り終えると、去って行かれた。アブラハムも自分の住まいに帰った。

語句の意味

- アブラハムからの接待を受け、男児の誕生を約束した人々は出発し（創一八16 a）、そのうちの二人がソドムに到着する（一九1）。この出発と到着の間には、主とアブラハムの対話が記されている。
- 20 節 ■ 「訴える叫び」。この語ゼアカーは「権利を侵害された者があげる助けを求める叫び」を指す。
- 21 節 ■ 「わたしは降って行き…見て確かめよう」。罰するより前に、「訴える叫び」について調査。
- 22 節 ■ 「その人たちは…主の御前にいた」。21 節では「わたしは見て確かめよう」と一人称単数形で語っていたが、ここでは「その人たち」と複数形。しかし、主はソドムを見下ろす所にアブラハムと留まっていたのだから、ソドムに向かったのは三人のうち二人（一九1を見よ）。神はアブラハムの前に立ったまま、同時にソドムに向かうことができるということか。
- 23 節 ■ 「正しい者を悪い者と一緒に滅ぼされるのですか」。個人と共同体との根深い統一を自明とする古代社会では、連帯責任が普通。アブラハムが取り上げようとする問題は、神の最終決定は多数者の悪に基づいて下されるのか、それとも少数者の正しさに基づくのか、ということ。
- 25 節 ■ 「正義を行われるべきではありませんか」。聖書の述べる正義は、絶対的規範になつた行為というより、すでに存在している共同関係にふさわしく誠実な行為。神は人間との関係において、多数の悪人を中心に行動するのか、それとも少数の正しい者か。
- 32 節 ■ 「もう一度だけ」。アブラハムが正しい者の人数を次第に減らしたのは交渉テクニクではなく、神への畏れから。

① 今日の朗読では、二人の御使いがソドムへと向かった後に、残った「主」とアブラハムの間に交わされた会話が朗読される。アブラハムはまず23 節で、正しい者と悪い者を区別することなく、一緒に滅ぼすのはおかしいと訴える。24 節になると、さらにすすめて、正しい者が五十人いたら、町全体を赦すべきではないか、と主張する。続く25 節を直訳すると

あなたにはとんでもないこと
このようにすることは、

つまり、正しい者を悪い者と一緒に殺し

正しい者が悪い者になることは。

あなたにはとんでもないことです。

全地を裁く方は裁きを行なわないのか？

となる。二度も繰り返されている「とんでもないこと」は、もともと「聖なるものを汚す」ことを表し、そこから「とんでもないこと」の意味で使われる。また、「裁き」と直訳した語（ミシュバート）は動詞「裁く」から派生した名詞で、ここでは「裁き手が持つべき資質としての正しさ」を表す。神は全地の「裁き手」ですから、「正しさ」を備えなければならないのは当然のことである。

このように問うアブラハムに対して、神は「五十人の正しい者がいるならば、町全部を赦そう」と述べて、願いを聞き入れる。それに力を得たアブラハムはさらに、「塵あくたにすぎないわたしですが、あえて：」とか、「主よ、どうかお怒りにならずに：」と述べて、必死に神が赦す条件の緩和を求めめる。神はアブラハムの熱意に負け、「五十人」が「四十五人」に、さらに「四十人」、「三十人」、「二十人」と下がってゆき、とうとう「十人のためにわたしは滅ぼさない」という言葉をアブラハムは手に入れる。

アブラハムと神とのやり取りは、滑稽にも思えるが、この物語の真意を知るために思い出すべきことは、旧約の時代の人々が共同体について抱く考え方である。現代人は共同体から離れても生きる個人を想像することができるが、旧約の人々にはそれは実に難しいことだった。というのは、彼らの個人生活は共同体のうちに深く根づいていて、そこから切り離された個人を思い浮かべることが難しかったからである。自分のあり方が共同体によって規定されているからには、逆に共同体のあり方に対して個人が責任をもたねばならないことにもなる。つまり、社会にゆがみがあるなら、その責任を社会全体が負うことになり、そのゆがみに直接関係ない個人であっても、いわば連帯責任が問われることになる。

この連帯責任という見方を前提にすれば、アブラハムの問いかけも理解しやすくなる。アブラハムが問題にしているのは、社会全体が神の決定を担わなければならないけれども、その決定は多数者の悪に基づいて下されるのか、それとも少数者の無罪に基づくのかということである。そこで、アブラハムは正しい者と悪い者とが同数の場合からはじめ、正しい者の数を次第に減らしてゆく。

アブラハムがこのような方法をとったのは、交渉のテクニクに長けていたからではない。むしろ、正しい者が少数であっても、正しさが存在するかぎり、それに応じて神が決定を下すという原則を確認したかったからである。そうであれば、「十人」以下の場合はどうなるのかと心配する必要はない。

というのは、イザヤ書53章が歌うように、「多くの人の」罪を担った「一人の僕」が、人々に平和といやしを与えている。さらに、「罪の中に死んでいた人」でさえも、神は一人のキリストと共に生かしてくださるからである。

② 「赦す（ナーサー）」

この語は基本的には「持ち上げる」を意味する。洪水の水は次第に増して箱舟を「押し上げ」、箱舟は浮かび上がった（創七17）。人が手を天に「上げ」れば、祈りの心を表し（詩二八2）、他人に向けて頭を「上げ」れば、敵意や対抗心を表す（士八28）。また、他人の顔を「上げる」ことによって、好意や恵みの心を示す（民六26）。

次に「持ち上げて、担う・持ち運ぶ」を表す。荷物や武器などいろいろなものを「担う」ことを表すが（創三七25）、特に、罪に使われる。カインは神に断罪されたとき、「わたしの罪は重すぎて負いきれません」と叫んだように（創四13）、人は犯した罪を担うことはできない。

そこで、年に一度の贖罪日に、イスラエルの人々のすべての罪を雄山羊に「背負わせ」、無人の地、荒れ野に追いやった(レビ一六22)。

最後に「持ち上げて、取り去る・赦す」ことをも表す。罪は人間の力では処理しきれないから、罪を「赦された」者は幸いだ、と詩編作者は歌う(詩三二1・5)。実に神は罪と背きと過ちを「赦す」方である(出三四7)

II コロサイの信徒への手紙2章6―15節

6 あなたがたは、主キリスト・イエスを受け入れたのですから、キリストに結ばれて歩みなさい。7 キリストに根を下ろして造り上げられ、教えられたとおりの信仰をしっかりと守って、あふれるばかりに感謝しなさい。8 人間の言い伝えにすぎない哲学、つまり、むなしいだまし事によって人のとりこにされないように気をつけなさい。それは、世を支配する霊に従っており、キリストに従うものではありません。9 キリストの内には、満ちあふれる神性が、余すところなく、見える形をとって宿っており、10 あなたがたは、キリストにおいて満たされているのです。キリストはすべての支配や権威の頭です。11 あなたがたはキリストにおいて、手によらない割礼、つまり肉の体を脱ぎ捨てるキリストの割礼を受け、12 洗礼によって、キリストと共に葬られ、また、キリストを死者の中から復活させた神の力を信じて、キリストと共に復活させられたのです。13 肉に割礼を受けず、罪の中にいて死んでいたあなたがたを、神はキリストと共に生かしてくださいました。神は、わたしたちの一切の罪を赦し、14 規則によってわたしたちを訴えて不利に陥れていた証書を破棄し、これを十字架に釘付けにして取り除いてくださいました。15 そして、もろもろの支配と権威の武装を解除し、キリストの勝利の列に従えて、公然とさらしものになさいました。

III 福音・ルカ11章1―13節

1 イエスはある所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」と言った。2 そこで、イエスは言われた。「祈るときには、こう言いなさい。

『父よ、

御名が崇められますように。

御国が来ますように。

3 わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。

4 わたしたちの罪を赦してください、

わたしたちも自分に負い目のある人を

皆赦しますから。

わたしたちを誘惑に遭わせないでください。』

5 また、弟子たちに言われた。「あなたがたのうちのだれかに友達がいる、真夜中にその人のところに行き、次のように言ったとしよう。『父よ、パンを三つ貸してください。6 旅行中の友達にわたしのところに立ち寄ったが、何も出すものがないのです。』7 すると、その人は家の中から答えるにちがいない。『面倒をかけないでください。もう戸は閉めましたし、子供たちはわたしのそばで寝ています。起きてあなたに何かをあげるわけにはいきません。』8 しかし、言うておく。その人は、友達だからということでは起きて何か与えるようなことはなくても、しつように頼めば、起きて来て必要なものは何でも与えるであろう。

9 そこで、わたしは言うておく。求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。10 だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。

11あなたがたの中に、魚を欲しがる子供に、魚の代わりに蛇を与える父親がいるだろうか。12また、卵を欲しがるのに、さそりを与える父親がいるだろうか。13このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。」

語句の意味

1節 ■「ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください。」。祈るイエスの姿を見た弟子たちは、自分たちにも祈りを教えて欲しいと願う。洗礼者ヨハネの弟子たちは他のグループとは違った祈りを持っていた(五33)。弟子たちがこのように願ったのは、イエスを中心とする一つの共同体として自分たちを意識し始めたしるしであろう。

2節 ■「父よ」。マタイの並行箇所(六9)では「天におられるわたしたちの父よ」。イエスはギリシア語ではなく、アラム語(ヘブライ語)で語ったと思われるが、そうであれば、ここでの「父よ」はアラム語のアツバであったと思われる。アツバは「元来、家族間で使われていた言葉で、年少の、または成人した子供が父親にもちいた語りかけであった。そこから年老いた男性に尊敬を込めてもちいられた語りかけでもあった」とされる。ユダヤ教における祈りには神を「父」と呼ぶ多様な表現があるが、アツバがもちいられることはない。しかし、新約聖書には、アツバというアラム語が音写された箇所が残されている。

ロマ8章14—17節

14 神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。15 あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、「アツバ、父よ」と呼ぶのです。16 この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒に証ししてください。17 もし子供であれば、相続人もあります。神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。キリストと共に苦しむなら、共にその栄光をも受けるからです。

ガラ4章4—7節

4 しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。5 それは、律法の支配下にある者を贖い出して、わたしたちを神の子となさるためでした。6 あなたがたが子であることは、神が、「アツバ、父よ」と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心へ送ってくださいました。7 ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子であれば、神によって立てられた相続人もあるのです。

マコ14章32—36節

32 一同がゲツセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、「わたしが祈っている間、ここに座っていないさい」と言われた。33 そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたが、イエスはひどく恐れてもだえ始め、34 彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」35 少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、36 こう言われた。「アツバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」

このような箇所が残されていることは、キリストを信じる教会がアツバという呼びかけになにか特別なものを見ていた証拠であろう。このような呼びかけを最初にもちいたのはイエス自身であった可能性が高い。イエスが告知する神は、貧しい者や罪人や落伍者に近づく神であり、アツバはそのような神を表すために最も適切な呼びかけであり(ルカ十一11—13、十五11—32)、祈りが聞き届けられることの確信を表す表現でもある(マタ六7—8)。■「御名…：御国」。神の王国の到来は神を信じて生きる者にとっては救いの実現に他ならない。■「崇められますように」。この動詞はハギアゾーの受動形。ギリシアが語としては、①「尊敬に値すると知る」、②「世俗から区別し、神にささげる」、③「清める」の意味。受動形で表現された動作の主体が誰であるか不明確。人々も可能だし、神も可能。

3節 ■「必要な糧」。「必要な」と訳されたギリシア語はエピウーシオスであるが、この形容詞の使用例はすべてのギリシア文献に二回しか使われていないので、意味を確定することがほとんど不可能。

可能性としては、①「あらゆる実態を超越した」、②「存在に必要な」、③「今日のための」、④「明日のための」、⑤「未来の(終末における)」といった意味が考えられる。物質的にも精神的にも、日々必要とする糧であり、同時に来るべき神の支配のために必要な糧でもある。

4節■「負い目のある人を皆赦しますから」。「赦す」という動詞はマタイとは異なり、現在形である。兄弟を赦す準備がいつも整っていることを強調することによって、神に自分の罪の赦しを願うことがいかに切実であるかを示す。

13節■「聖霊」。ルカ福音書での「聖霊」は、人々の前でイエスを主として告白させる神からの力であり、人間を内側から造り替える力でもある。

①弟子たちはイエスに「わたしたちにも祈りを教えてください」と願う。洗礼者ヨハネは自分の弟子たちに独自の祈りを教えており、その祈りが彼のグループを他から区別するしとなった。イエスの弟子たちが祈りを与えるようにと願ったのは、イエスに従う共同体としての自覚が芽生え始めていたからであろう。

2-4節は、イエスが教えた祈りである。この祈りの特徴は「父よ」という単純な呼びかけにある。この言葉の背景にはアラム語の「アツバ」がある。イエスは特別な親しみを込めて「アツバ」と神に呼びかける。この呼びかけに端的に現れているように、イエスの神は、親しみやすい慈愛に満ちた方である。イエスはこの親しみを込めた呼びかけに続けて、五つの祈りを教えるが、初めの二つは神のための祈りである。御名があらゆる場所で崇められ、また御国(神の支配)が来るようにと祈る。これは神による救いの完成を願う祈りである。

続いて「わたしたち」のための祈りが三つ続く。必要な糧が毎日与えられ、罪が赦され、誘惑へと引き込まれるのを見逃さないようにして欲しいという祈りである。神に罪を赦してもらうためには、自分も常に他人を赦す心構えが必要である。だからマタイのアオリスト形とは異なっており、ルカは「赦す」という動詞を現在形にしている。

5-13節では二つのたとえが語られるが、その間(9節)に、

求めなさい—与えられる

探しなさい—見つかる

たたきなさい—開かれる

求めるものは受け、

探す者は見つけ、

門をたたく者には開かれる

というように、命令文と肯定文を用いて、人間が取るべき姿勢を述べている。命令文、肯定文のどちらにも「求める、探す、たたく」が使われており、その重要性が強調されている。

その前後にたとえが置かれているが、最初のたとえでは、真夜中にパンを求めて友人の家を訪ねる人の話が語られ、後のたとえでは子供に魚や卵を求められた父親の話が語られる。最初のたとえの要点は8節の文章構成に見事に示されている。原文では次のように配列されている。

たとえ与えないとしても

立つて

彼の友であることのゆえに

彼の執拗さのゆえに

起きて

彼が必要なものを与えるだろう

ここで強調されているのは「執拗さ」である。祈る時には「執拗であること」が大切なのである。

後のたとえのねらいは13節にある。人間は不完全さをもっているが、父親は子供には良い物を与えようとする。そうであれば、完全である天の父は地上の父よりもさらに良い物、すなわち「聖霊」を与えてくださる。ルカにとって「聖霊」は迫害される者に語るべき言葉を与え、困難を乗り越えさせる力である。

人がひたむきに祈るなら、神はいつも誠実にその願いに応えようとされる。神の国の宣教に赴く弟子たちは、順境にも逆境にも出会うが、どんな時にも祈り求めて与えられた聖霊によって常に新たにされ、先へと向かう力を受ける。イエスを信じ、その教えを宣べ伝える者に必要とされることは、慈愛の神に「父よ」と呼びかけて祈り、しつように「求め、探し、たたく」ことである。そうすれば祈りに誠実に応える神は必ず聖霊を送り、必要な助けを与える。

②「探す・ゼーテオー」

この語は「失ったものを捜し求める・何とか関係を持つ」として「探す」とか、「何かを得ようと試みる」の意味。

④宗教的な意味合いを持たずに、単純に「探す・得ようと試みる」の意味で使われ、両親が少年イエスを「探す」（ルカ二48、49）とか、コルネリウスからの使者がペトロを「探す」（使一19）ときには敵意はありませんが、ヘロデ王がイエスを殺すために「探す」というときには敵意が明らかである（マタ二13）。

⑥宗教的な意味合いを含む用例では、多くの場合、神による保護を含んでいる。失われた羊や銀貨を「探す」のは保護のためである（ルカ一五8）。世の人は自分の命を救おうと「努め」（ルカ一七33）、自分の義や知恵や利益や栄誉を「求めます」が（ロマ十3、1コリ一22）、神を信じる者がまず神の義を「求める」のもそこにこそ真の保護があるからだ（マタ六33）。

IV 今日の朗読から

塵あくたにすぎない

アブラハムが「塵あくたにすぎないわたしですが、あえて、主に申し上げます」と述べるとき、この「塵あくたにすぎない」は、もちろん神の前での自己卑下を表す表現です。しかし、弱さは人間の本質の一部と認め、しかもそれを克服する力が自分には欠けていると心得る者は確かに幸いであろう。なぜなら、自分の力を当てにしないで、むしろ自分を変えてくださる方に信頼することを知っているからです。アブラハムの自己卑下は、中身の無いジェスチャーではなく、「正しく裁く方」を信じることから生じる謙虚さです。それにしても、神の「正しさ」は人間の予想を超えた仕方で見られました。

わたしたちの罪を赦し

私たちの考える「正しい裁き」は、悪を根絶することを含んでいます。しかし、神が最終的に示した「正しさ」は、「一切の罪を赦し、……わたしたちを訴えて不利に陥れていた証書を破棄し、これを十字架に釘付けして取り除く」という形で現されました。

正しく裁くはずの方が選んだ道は、十字架によって「一切の罪を赦す」ということにありました。これは「塵あくたにすぎない」人間が要求できるようなことではありませんが、神は愛のゆえに、この道を選びました。こうして私たちは「一切の罪を赦された」者として生きることができるようになっています。私たちは与えられた命を生きているのです。

聖霊を与えてください

今日の福音でイエスは主の祈りを教えてから、「求めなさい、そうすれば与えられる……求める者は受け……」という勧めを中心に置き、その前後に二つのたとえを述べています。最初のたとえでは人の取るべき態度が「しつように頼む」こととして述べられ、二番目のたとえでは神の誠実な応答を「聖霊」の授与として描いています。

聖霊は人を造り替える神からの息吹です。それを受けるときに、順境の中でも逆境の中でも神の言葉を見だし、新たな力を手にします。まさに祈りとは「くどくどと人間の思いを訴えること」ではなく、神からの助言と懲らしめによって現にある自分の姿を越えて行くための鍛錬なのです。